

J01a **2008年6月に起こった矮新星 V466 And の superoutburst における可視光観測**

大島誠人、加藤太一、前原裕之(京都大)、田邊健茲、今村和義、国富菜々絵(岡山理科大)、植村誠、笹田真人、新井彰(広島大)、清田誠一郎、中島和宏、伊藤浩、Jochen Pietz、Lubomir Urbancok、Jeremy Shears、Pavol A. Dubovsky、Michael Richmond、E. Morelle、Rudolf Novak、Jani Virtanen、Crawford Timothy R.、de P. Pontiere、Terskol Observatory Team、VSB-Technical Univerzity Team (VSNET Collaboration)

V466 And = OT J020025.4+441019 は、2008年9月1.6日に板垣公一氏によって新星の可能性のある天体として発見された。のちに S. Korotkiy らによってこの天体が周期 0.055 d のハンプ状の変動を示すことが報告され、この天体が矮新星であることが判明した。

増光後、1週間程度の間はこの天体には通常の SU UMa 型にみられるような superhump でなく、変光範囲が小さいダブルピーク状の変動を示した。これは、矮新星の中でも特に WZ Sge 型に属する天体での増光初期に典型的にみられる early hump が見えていたものだと考えられる。この時期の周期は 0.05639(3) 日であった。その後シングルピークになり、9月10日ごろから通常のスーパーハンプがみられはじめた。

その後 V466 And は  $0.1 \text{ mag d}^{-1}$  のほぼ一定の速度で減光を続けていったが、9月20日に減光速度を上げ、極小光度附近の 18 等まで減光した。通常の superhump が現れてから急減光に転ずるまでのデータから得られた周期は 0.05715(3) 日であった。

一方、減光ののちに late superhump と思われる 0.06047(8) 日周期の変動がみられた。これはプラトー時の superhump よりわずかに長く、Kato et. al. (2008) で示されているように、3:1 の共鳴半径の外側にある物質による WZ Sge 型特有の現象によるものだと考えられる。